

# 協働性を育むことを意図した社会科授業における児童の意識

## ー タブレット端末・動画クリップを活用した協働学習 ー

山口眞希（金沢市立大徳小学校・放送大学大学院）・今野貴之（明星大学）

中川一史（放送大学）・大本秀一（日本放送協会）

概要：小学校5年生社会科の学習において、協働性を育みながら自分の考えを深めることをめざして、自他の情報を組み合わせて自分の納得解を作り出すという協働的な学習を取り入れた授業を設計した。資料として NHK for School の動画クリップを活用し、タブレット端末で視聴した。この学習によって児童が何を考えたか意識調査をしたところ、相手意識を強く持って学習していたこと、動画クリップの活用を肯定的に捉えていたこと、タブレット端末の特性を児童自らが学習に生かしていたことが明らかになった。

キーワード：協働学習，タブレット端末，動画クリップ，社会科

### 1 はじめに

文部科学省(2015)は、次期指導要領改訂に向けての論点整理の中で、立場や考え方の異なる他者と協働で学んだり、調べてわかったことを友達と伝え合うことで自分の知見を広めたりする経験を積むことが必要であると述べている。その経験とは、たとえば、他者に対して自分の考え等を根拠とともに明確に説明することや、対話や議論を通じて多様な相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりすること、多様な人々と協働していくことなどである。

そこで、協働性を育みながら自分の考えを深めることをめざして、小学校5年生を対象とした社会科の学習において、自他の情報を組み合わせて自分の納得解を作り出す協働的な学習を取り入れた授業を設計した。具体的には、立場が2つに別れるような課題を提示し、グループを2つに分けてそれぞれの立場に分かれて情報を集め、集めた情報を互いに伝え合い、比較・統合しながら自分の論を作りあげ、全体に伝えるという授業設計である。「友達と情報を伝え合わなければ自分の結論を出すことができない」という状況を設定した。

本実践では情報を集める際には教科書、資料

集の他に NHK for School で配信されている動画クリップ（学習内容を短くまとめた動画映像）を活用した。益子(2003)はデジタルコンテンツの有用性について「目で見てわかる、耳で聞いてわかるという“即理解性”があり、文字情報と比較すると極めて具体性が高い」と述べている。本実践は「持っている情報を相手に伝える」という協働学習を設定しているため、情報の内容をどの子も理解している必要がある。文字情報だけでは理解が難しい児童への支援として動画クリップの活用を考えた。

動画クリップはタブレット端末で視聴するが、視聴以外にも、友達に情報を伝える際の資料提示ツールとしてタブレット端末を活用した。動画クリップやタブレット端末といった ICT の活用が、学習理解を高めるだけでなく、情報を伝え合う場面において関わり合いを促進する媒体となるのではないかと考えた。

このような協働性を育むことを意図した授業によって、児童がどんな学びを得たのか、動画クリップやタブレット端末の活用をどう捉えているのかという点も含めて明らかにしたい。

表1 単元構成（下線は本研究の対象となる時間）

一次② 課題を持つ	1. 食べ物のふるさと調べや米の生産地調べから、「なぜ日本では米作りがさかんなのか」という課題をつかむ 2. 庄内平野で米作りがさかんな理由を予想する
二次⑤ 庄内平野の米作りの様子をつかむ	1. 動画クリップを活用して、庄内平野で米作りがさかんな理由を調べる 2. 農事歴作りをすることで、1年間休みなく作業をしていることに気づく 3. 4つの資料を分担して調べ、米作りの工夫や努力を理解する 4. 米作りは生産者同士の協力とJAなどの支援で成り立つことを理解する 5. 運輸の働きによって生産地と消費地が結ばれていることに気づく
三次⑤+課外 日本の米作り農業のこれからの考える	1. 資料から、日本の農業が抱える問題点・農業の新しい取り組みについて知る <u>2. 動画クリップ等を活用して情報を収集する（調べ学習）</u> <u>3. 得た情報を伝え合い、農業の発展について自分の納得解を作りあげる</u> 4. 5+課外、全校児童に米の消費を呼びかけるCMを作成し広める

## 2 研究の目的

本研究の目的は、協働性を育むことをねらいとした社会科の学習活動から、児童が何を考えたのか児童の意識調査をすることである。

これまで、協働的な学習では「話し合いの量的な側面から学習状況を捉えがち（中田 2011）」との批判もあるように、児童が何を学んだか見とることが難しいと言われてきた。本研究によって得られた知見は、協働学習場面における児童の学習を見とる際の一助となると考える。

## 3 研究の方法

### （1）対象児童および単元

金沢市立X小学校5年生 31名を対象に社会科「米作りのさかんな地域（東京書籍）」の単元で実践を行った。この単元のねらいは米の生産の様子を捉え、自然環境との関わりやおいしく安全な米作りにかかる生産者の努力や工夫について理解することである。単元構成は表1の通り。本実践は、三次の米作りの未来を考える学習で協働的な学習を取り入れた。本研究の対象となる三次3時間目の授業の流れを表2に示す。

この時間のねらいは「農業のかかえる問題と、

表2 三次3時間目の学習の流れ

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 学習のゴール、話し合いのめざす姿を確認</li> <li>2) 互いが得た情報を伝え合う</li> <li>3) 自分の結論を仮決定しフリー交流</li> <li>4) 自分の結論を決定し記述</li> <li>5) 全体交流</li> <li>6) 学習のまとめ・ふり返り</li> </ol> |
|--|

新しい取り組みについて理解し、農業の今後について考える（思考・表現・判断）」ことである。児童の疑問をつなげ、『日本の農業は発展する可能性はあるか』という課題を設定した。

### （2）指導の留意点

#### ①協働性を育む学習形態

一人一人が課題解決への責任を持ち、一方の立場にとらわれず物事を多面的に見られるよう、4人グループを2人ずつに分け、自分の意思とは関係なく「A.可能性はある」「B.可能性は少ない」の根拠となる情報を収集するペアに担当をふり分けた。それぞれのペアの説明を中立の立場で聞いたうえで、自分の解を導き出すことをゴールとした。互いに情報を伝え合い、理解し合えなければ答えが出せないという状況を作り出すことで、協働性が育まれると考えた。

#### ②タブレット端末による動画クリップの視聴

調べ学習では、教科書・資料集の他に、NHK for School「未来広告ジャパン！」の関連動画クリップ（1本約2分・6本から選択）を資料として活用した。

動画クリップをタブレット端末で視聴する意図は、理解できるまで何度でも視聴できるという利点があることに加え、キャプチャ機能によって動画のキーシーンの静止画像を撮影できるからだ。相手ペアに説明する時に、その画面を示しながら説明できると考えた。

#### ③「納得解」を導き出すための工夫

調べてわかったことは付箋に書き出したが、全部伝えるのではなく、特に相手に伝えるべき

だと思った事実と絞らせた（付箋 10 枚分）。これにより課題と結びつきの強い情報だけが取捨選択され、相手ペアも内容を理解しやすくなる考えた。

また、グループで説明し合った後、自分の考えを決定する前にクラス全体でフリー交流する場を設けた。胸につけた色カードで、現時点での自分の考えを明示しておき、「同じ色カードの人と議論して自分の考えを確かにする」「違う色カードの人と議論して新たな気づきを得る」など、目的を持って交流させた。

#### ④協働で学ぶ価値付け

協働学習では、今後の人生で必要となる社会的スキルを獲得できるなどの協働の価値提示を行うことも重要とされる（JACOBS 2002）。「話し合うことで一人の学びがみんなの学びになる」「正解のない課題に対しをみんなで議論して解を作り出すことがこれから必要な力」というような協働で学ぶ価値を授業中に何度も伝えた。

#### （3）分析の方法

授業を通して、児童が考えたことを調査するために、学習後に質問紙調査と自由記述による回答を分析データとして取得した。質問紙調査は、全国放送教育研究会連盟が放送番組を活用した主体的・協働的な学習の評価のために作成したものを使用した。「とても」4点、「まあまあ」3点、「あまり」2点、「全然」1点として平均点を算出し、肯定回答（とても、まあまあ）の割合を求めた。自由記述の回答は、記述内容を分類した。

を分類した。

## 4 結果

### （1）質問紙調査の結果

質問紙調査の結果を表3に示す。質問内容から「協働性に関する評価」「動画クリップの活用に関する評価」「社会科の技能・思考・表現に関する評価」の3つのカテゴリーに分類した。

協働性に関する評価では、5項目とも平均値、肯定評価の割合が高かった。特に項目3, 4, 5は平均値が3.9以上、肯定評価も100%であり特に高い数値を示している。動画クリップの活用に関する評価では、2項目とも平均値3.8以上、肯定評価100%と高い数値であった。社会科の技能・思考・表現に関する評価も、4項目とも平均値、肯定評価ともに高い数値であった。

### （2）自由記述の分析

自由記述の内容を整理すると、次の4つに分類することができた。

- ①「伝えようという気持ちを強く持ってよい話し合いができた」などの【よい話し合い】に関する記述
- ②「最初は発展する可能性は少ないと思ったが、いろいろな人の意見を聞いたら可能性はあるという考えに変わった」などの【友達との関わりによる考えの変容】に関する記述
- ③「友達にしっかり説明できた」などの【相手に伝えること】に関する記述
- ④「TPPの問題は農家を苦しめるからやはり発展の可能性は少ない」などの【課題に対する自

表3 質問紙調査の結果

分類	質問項目	平均値	標準偏差	肯定(%)
協働	1 自分の考えや意見をわかりやすく伝えることができた	3.677	0.590	94%
	2 学習した内容を友達に正しく説明できた	3.613	0.605	94%
	3 友達と協力して学習できた	3.903	0.296	100%
	4 友達と教え合うことができた	3.935	0.246	100%
	5 グループ学習に進んで参加できた	3.968	0.177	100%
動画クリップ	6 動画クリップを使った学習は楽しい	3.871	0.335	100%
	7 動画クリップを使った学習はわかりやすい	3.871	0.335	100%
社会科の技能・思考力・表現力	8 動画や資料から必要な情報を読み取ることができた	3.839	0.447	97%
	9 動画や資料から読み取った情報をもとに、自分の考えを持てた	3.839	0.573	97%
	10 わかったことや考えたことを、理由を明確にしてまとめたり説明したりできた	3.613	0.704	94%
	11 友達の意見と比べたり関連づけたりしながら自分の意見を表すことができた	3.710	0.520	97%

分の考え】に関する記述

## 5 考察

これらの質問紙調査・自由記述の結果から、本実践において、児童は相手意識を強く持って学習していたことがわかる。友達と情報を伝え合わなければ自分の結論を出すことができないという学習展開にしたことにより、「相手のペアがわかるように調べて説明しなければ」「友達の情報をよく聞かなければ」という必要感のもとに学習したからだと考える。本実践では、自分の思いとは関係ない立場に立って調べ学習をしたので、自分が調べた方の立場に考えが偏ることが懸念されたが、調べ学習をした立場と最終的に出した結論が同じだった児童が16人、変わった児童が15人と半々であり、影響はなかったと考える。つまり、グループでの話し合いやフリー交流での関わり合いを通して、友達の情報や考えをよく聞いて判断し、自分の結論を出していたと言える。

また、質問紙調査の結果からは、動画クリップの活用を肯定的に捉えていることもわかった。学力下位に分類される児童も全員が「動画クリップを使うとわかりやすい」と肯定評価している。動画クリップの視聴メモを確認すると、動画の内容を正しく理解し、必要な情報を取り出しているペアがほとんどであった。タブレット端末で視聴したことにより、理解できるまで何度も視聴できたことや「内容を友達に説明しなければならぬ」という授業のしかけが影響していると考えられる。

さらに、授業中の行動記録からは、タブレット端末の特性を児童自らが自分の学習に生かしていることもわかった。相手ペアに情報を伝える場面では、タブレット端末に保存した動画クリップの静止画像を示しながら説明する児童がほとんどであった。フリー交流の時にも、タブレット端末を持ち歩き、根拠となる画像を示しながら友達と議論をしていた。友達が提示した画像のなかで、後で考えをまとめる際に必要と

なりそうな画像を、タブレット端末の転送機能を使って自分の端末に保存したり、自分の結論を全体に発表する場面ではApple TVを使って大型テレビに画面を転送し、提示しながら発表したりする様子も見られた。ある児童が発表している時に、別の児童がその子の考えの根拠となりそうな画像を転送するといった場面も見られ、タブレット端末の可搬性、保存・共有機能といった特性を、児童が理解し、生かしていた。

## 6 まとめと今後の課題

本研究では、協働性を育むことをねらいとした社会科の学習活動から、児童が何を考えたのか児童の意識を調査した。その結果、児童が相手意識を持ち、友達との関わり合いから自分の考えを構築していたこと、動画クリップを活用すると理解しやすいと感じていたこと、タブレット端末の特性を学習に生かしていたことがわかった。このような、協働性を育むことを意図した授業を繰り返すことで、児童の意識にどのような変容が見られるのか、今後継続的に調査し、学習の見とりや授業設計に生かしたい。

## 参考文献

- 文部科学省(2015)教育課程企画特別部会論点整理, p10
- 益子典文(2003)デジタルコンテンツを活用したわかる授業・考える授業の設計, <http://sakural.higo.ed.jp/ws/e-class/sekkei.htm> (2016, 8, 19 参照)
- 中田正弘(2011)グループによる話し合い活動に対する教師の意図と指導場面におけるズレ, 帝京大学教職員大学院年報 2:pp15-22
- JACOBS. G., POWER. M., LOH. W. 他 (2002) 先生のためのアイディアブック-協働学習の基本原則とテクニック-, ナカニシヤ出版
- NHK for School「未来広告ジャパン」<http://www.nhk.or.jp/syakai/mirai/> (2016, 8, 19 参照)